

奈良県橿原市八木町を取り巻く地域社会環境の変遷

——周辺地域との比較分析を中心に——

相模 奈々

はじめに

2000 年前後から、全国各地でアートイベントが行われている。アートイベントには、初期段階の企画をする人、開催に向け準備をする人、アート作品を制作し展示する人、そしてその場所へ訪れる人など様々な立場の人が関わっている。

奈良県では、地域住民によるまちづくり活動と結び付けたアートイベントが開催されている。日頃からまちづくり活動を行う地域住民は、アートイベントをどのように受け入れ、そこから得る気づきを、どのようにまちづくり活動に還元していくのであろうか。そのことを明らかにするためには、地域に存在する文化や歴史など周辺を取り巻く環境と合わせて分析を進めていく必要がある。アートイベントは、それ単体で成立するものではなく、開催地域のもつ地域性や歴史といった重層的構造の上に成立するものであると考えられるためである。

そこで本稿では、まちづくり活動を行う地域住民が、アートイベントをどのように受け入れて、自分たちの活動として行っていくのかということを分析していくための基礎資料として、開催地域のもつ地域性や歴史について取りまとめを行うこととする。アートイベントの開催地域のひとつである橿原市八木町（以下、八木町とする）を事例に、地域に存在する文化や歴史など周辺を取り巻く環境について、その変遷を整理する。

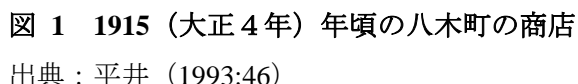
八木町は、昔ながらの町家が現存する地域である。『橿原市史』によれば、八木町はかつて商業の町であったとされるが、現在は住宅地となっている。八木町が商業の町から住宅地へと変化するまでには、地域社会においてどのような変化があったのであろうか。八木町が商業の町から住宅地になるまでの地域社会環境の変遷について、同町を取り巻く周辺環境の変化に注目し、八木町周辺地域との比較を通して資料から分析を行う。ここでは、地域社会において町を取り巻き、時の流れと共に変化する様々な周辺環境のことを、地域社会環境と呼んでおきたい。

1 奈良県橿原市八木町について

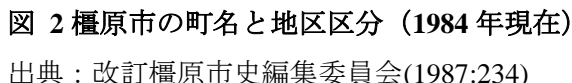
1.1 歴史的概要

橿原市は奈良県中部にある 12 万 5 千人程の人口を有する都市である。1956（昭和 31）年 2 月 11 日に、八木町を含む旧高市郡下、旧磯城郡下の 6 町村が合併して県下 5 番目の都

八木町は中街道（下ツ道）と大阪街道（横大路）の交差点を中心とする町である。6町村の中でも歴史が古く、室町時代の頃には市場が常設されていた（樫原市史編集委員会 1962:128）。近世に入ると、街道町としての機能を強めながら、近郊の日常的な中心地として熟していった。



続いて、八木町の地名の変遷を見てみると、平安末期から八木という名は存在する。中世に入り江戸時代から1889（明治22）年までは、高市郡八木村、十市郡北八木村との名称であった。その後高市郡八木村、小房村、十市郡北八木村、の3村が合併し、1889（明治22）年から橿原市成立の1956（昭和31）年までは、高市郡八木町との名称であった。その間の1949（昭和24）年には、磯城郡耳成村内膳が編入された。橿原市成立以後は橿原市八木町となり、北八木町、八木町、南八木町、小房町、内膳町に分離した（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1990:1104-1105）。



橿原市では各町が地区として区切られている。現在は図2の区分における畝傍地区

図 2 橿原市の町名と地区区分 (1984 年現在)
出典：改訂橿原市史編集委員会(1987:234)

が、畝傍地区と白樫地区に分けられた 11 地区で構成されている。そのうち八木町が含まれるのが八木地区であり、八木町の他に北八木町、南八木町、小房町、内膳町が属している。

本稿で取り扱う八木町の範囲は、磯城郡耳成村内膳が編入されるまでの旧高市郡八木町の頃の範囲を指しており、現在の町名でいうところの、北八木町、八木町、南八木町、小房町の 4 町を含んでいる。

2 政治的環境——畝傍町との対立意識

1956（昭和 31）年 2 月 11 日に、八木町を含む旧高市郡下、旧磯城郡下 6 町村が合併して橿原市となった。橿原市成立の際には八木町は合併に関わる 6 町村の中でどのような位置づけであったのであろうか。それを明らかにするため、合併前後の新聞記事について検討を行うこととした。合併の経緯を追うことで、当時の町の間を読み取ることができる考えたためである。合併前後の新聞を見ると、全国区の新聞である『朝日新聞』では、1 面に小さく橿原市成立の記事が掲載される程度である（『朝日新聞』1956.2.10, 1 面）。一方、奈良県の地方新聞である『大和タイムス』では、橿原市成立に関する話題が大きく取り上げられている。そこで、地方新聞である『大和タイムス』を資料として橿原市成立に関する記事について検討を行い「橿原市成立まで」と「第 1 回橿原市長選まで」のふたつの局面に分けてまとめた。

2.1 橿原市成立に関する新聞記事からの検討

合併当日である 1956（昭和 31）年 2 月 11 日付の新聞記事と、その前段階の調印式が行われた日である同年 1 月 27 日付の新聞記事を対象とすることとした。

2 月 11 日付の『大和タイムス』には、橿原市成立に関する記事が掲載され「十六年間の努力実る」という小見出しがつけられている。合併に至るまでの経緯についてまとめたものが図 3 である。

年代	出来事
1940(昭和15)年	橿原市合併の話はこの年に非公式ではあるが計画されていた。八木町、今井町、畝傍町の三町長が話し合いを進めていたが、八木町と畝傍町の意見が合わずに話がまとまらなかった。
1948(昭和23)年	八木町、今井町、畝傍町三町の正副議長が橿原市合併に向けて、高市郡議長会を結成した。しかし八木町と畝傍町の両町長の意見が合わずに立ち消えとなった。
1953(昭和28)年	町村合併促進法が施行され、3度目の橿原市合併の話題となった。この時には、鴨公村、真菅村、耳成村の三村も合併の計画案に加えられたが、八木町、今井町、畝傍町の三町が中心となって協議を進めた。市制促進協議会を開くことを決め、その日程まで決めたが、畝傍町が「市庁舎を畝傍にもってくる」との条件を提示したことにより、話し合いを始める前に解散した。
1955(昭和30)年	前高市地方事務所長が六ヶ町村長に、橿原市参加の強い呼びかけを行った。地方事務所が廃止された9月、六ヶ町村合併促進協議会設置の調印が行われ、橿原市合併に向け本格的に始動した。
1956(昭和31)年	1月27日に調印式。2月11日に合併。

図 3 橿原市成立までの主な出来事

出典:『大和タイムス』1956.2.11, 5 面より作成

また、1月27日付の紙面の1面「社説」コーナーでは、次のような文章が書かれている。

いよいよ橿原市も実現することになったわけですが、これほど困難をきわめた町村合併もチョッとめずらしいでしょう。地理的な条件その他の事情からみれば、いちばん先に市制が実現していなければならないはずなのに最後までゴタついていたわけです。それには町村合併に際して求心的に作用する大きな中心がなく、かえって八木、今井、畝傍という同規模の町が三つもあって、これが相互にケン制したり反発したりして統一を困難にした事情も考えられましょう。（『大和タイムス』1956.1.27,1面）

これらの記事から、次のふたつの事柄を読み取ることができる。ひとつめは、橿原市成立までに必要以上の年月がかかったことである。ふたつめは、町村同士がけん制し合っていたことがその原因であるということである。新聞記事から、16年もの期間を要しておりスムーズでなく、八木町と畝傍町の意見の相違により合併の話が2度も立ち消えになったことがわかる。また、1月27日付の記事には「八木、今井、畝傍という同規模の町が三つもあって、これが相互にケン制したり反発したしたりして統一を困難にした」と述べられているが、2月11日付の新聞記事による合併の経緯においては、今井町の明確な言動は示されていない。この時期の今井町は、このような地域社会の政治的な場における発言権を有していなかったのではないかと推測される。他は3つの村であったことから、八木町と畝傍町が存在感を示していたものと考えられる。

当時、八木町は地域の日常的中心地として機能していた。一方の畝傍町は1928（昭和3）年に白橿村から畝傍町へと昇格。橿原神宮を有する畝傍町の商店等は、1940（昭和15）年に執り行われた紀元二千六百年祭における多くの参拝客により潤っていた。戦時下において橿原神宮という天皇の宮を有する畝傍町は、政治的権威を保持し、経済的にも裕福な状態であったと考えられる。合併協議はこの頃から行われていたため、畝傍町はそれに際して発言権と影響力を持っていたのだと考えられる。合併協議は戦後に渡っても続けられた。戦後、橿原神宮への参拝客が激減したとはいえ、思想文化が急激に変化したわけではなく、畝傍町の政治的権威は衰えていなかったものと考えられる。

1956（昭和31）年1月27日付、2月11日付の新聞記事を検討した結果明らかになったことは、橿原市成立当時、合併に関わる6町村の内、八木町と畝傍町が地域社会における政治的発言権を持っていたことである。政治的発言権を有するということは、地域社会において政治的地位を有していたことの表れでもあるといえる。

2.2 第1回橿原市長選に関する新聞記事からの検討

橿原市成立に関するもうひとつの重要な局面は、第1回橿原市長選である。第1回市長選までの変遷と結果は、合併前の旧6町村の政治的地位が関係する局面であるといえる。どの町の人物が初代橿原市長となるのか、第1回橿原市長選に関する新聞記事を検討する

ことで、地域社会における政治動向を明らかにすることが出来るのではないかと考えた。

第1回樫原市長選は1956（昭和31）年3月30日に行われ、結果としては旧八木町議会議員の好川三郎氏が初代樫原市長となった。選挙当日までの6町村の候補者の動向はどのようなものであったのかを新聞記事から以下にまとめた。

はじめに、候補者について紹介されている1956（昭和31）年3月19日付の新聞記事を見ていく。八木町からは、旧八木町議会議員の好川三郎氏と旧八木町長の2名が立候補、畝傍町からは、旧畝傍町長を含む3名が立候補した。

次に、第1回樫原市長選の翌日である1956（昭和31）年3月31日付の新聞記事を見ていく。同日付の新聞には「旧村町間の融和 新市長の課題」との見出しがつけられた以下のような記事が掲載されている。

市長選挙は終わったが、この選挙にからんでこんご予想される問題は“旧村町間の対立感情”であろう。発足してから日が浅いために当然あるべき問題なのだが、この市長選挙はそれを一そう根強くしたことだ。個人演説会でもややもすると旧村町の利害にとらわれた面がどぎつく語られていた。（『大和タイムス』1956.3.31,1面）

上記のふたつの記事から、樫原市成立時に続き、第1回樫原市長選挙においても八木町と畝傍町が対立意識をもっていた様子がうかがえる。

このようにして「樫原市成立まで」と「第1回樫原市長選まで」のふたつの局面に関する新聞記事を検討することで、八木町、畝傍町との政治的対立意識について明らかにすることができた。6町村の合併と、その後の第1回市長選に際しては「旧町村間対立感情」の存在が政治動向に関係していたこともわかった。このような樫原市成立における政治動向は、八木町にとって、町を取り巻く政治的環境の変化ともいえる。

3 文化的環境——今井町の存在

八木町の西隣にある町が今井町である。今井町は中世の頃、本願寺御坊が建立されたのをはじまりとし、商業の町として発達した（樫原市史編集委員会 1962:131-134）。近世に入ると金融資本の町へと転換し、明治初期頃までは南大和の中心地として発展していた（樫原市史編集委員会 1962:134,改訂樫原市史編集委員会 1987:211）。ところが、明治維新という社会状況の大きな変化を受けて以降は衰退の一途を辿ることとなり、昭和に入っても、駅の建設計画に反対するなどして繁栄からは遠ざかっていた（改訂樫原市史編集委員会 1987:211）。しかし、江戸時代から残る町並みを保存するという住民たちの地道な努力の末、1993（平成5）年には重要伝統的建造物保存地区に選定された。その結果、現在では町並み保存の町として知られるようになり、観光地にもなっている。

今井町は明治維新以降衰退期であったとはいえ、樫原市成立以前の高市郡においては、地域における二大商業の町のひとつであった。明治期から現在に至るまで、八木町と今井町は、地域社会においてどのように位置づけられ、捉えられてきたのか。それを明らかにするため、帝国議会および国会の会議録における地名の出現頻度とその会議録の内容について分析を行うこととした。帝国議会検索システム、国会会議録検索システムの検索機能を用いて「八木町」「今井町」をキーワードとして検索した結果について分析を行い、帝国議会会議録と国会会議録に分けてまとめた。

3.1 帝国議会会議録の分析

帝国議会全会期である 1890（明治 23）年 11 月～1947（昭和 22）年 3 月の本会議・委員会の速記録から、八木町、今井町に関する発言を抽出した。キーワードを「八木町」と入力した検索結果は 8 件、「今井町」と入力した検索結果は 0 件であった。

検索結果を具体的に見ると「八木町」の検索結果のうち高市郡八木町に関するものの件数は 8 件、内容は全て同一の事柄で、裁判所出張所設置の件についてであった。その記録のうち、当時の八木町の繁栄の様子を表すものがある。1917（大正 6）年の会議録である。そこには、以下のように記されている。

八木逸郎君は八木町は高市郡の中心にして繁盛なり従て登記事務も多き所轄高田出張所と距離遠きのみならず所在地高田町とは郡域を異にし民情亦同じからず依て八木町に登記所を設置せらるれば同地方民の幸福なりとの旨を述べ（衆議院請願委員第二分の会議録,1917.7.6）

冒頭部分において「八木町は高市郡の中心にして繁盛なり」という発言が記録されており、八木町が高市郡の中心地として捉えられていたことがわかる。また、帝国議会において八木町に関するこのような発言があった一方で、今井町に関する発言は全くなされなかった。明治から昭和初期にかけての時期は、今井町よりも八木町が主要な町として機能、認識されていたことを示していると考えられる。

3.2 国会会議録の分析

第 1 回国会（1947（昭和 22）年 5 月）以降の本会議、委員会等の会議録から、八木町、今井町に関する発言を抽出した。キーワードを「八木町」と入力した検索結果は 62 件、「今井町」と入力した検索結果は 22 件であった。そのうち高市郡八木町、樫原市八木町に関するものは 16 件、高市郡今井町、樫原市今井町に関するものは 10 件であった。このうち、議題として取り上げられている場合を「議題」、議題としてではなく事例としての紹介や地名として名前が出された場合を「議題外」として「八木町」「今井町」別に件数を集計したものが図 4 である。

	昭和20年代	昭和30年代	昭和40年代	昭和50年代	昭和60年代	平成一桁代	平成10年代	平成20年代
八木町(議題)	8	0	1	0	0	0	0	0
八木町(議題外)	3	2	1	0	0	0	0	0
今井町(議題)	3	0	0	0	0	0	0	0
今井町(議題外)	0	0	0	1	0	2	5	1

図 4 国会会議録における「八木町」「今井町」の「議題」「議題外」別出現頻度

出典：国会会議録検索システムホームページ検索結果より作成

昭和 20 年代から平成 20 年代に至るまでの検索結果は、年代に対して均一的でなく偏りがあることがわかる。具体的には、昭和 20 年代から 40 年代頃は八木町が「議題」にて取り上げられている一方、今井町は平成に入り、「議題外」における場面で発言に含まれるようになっていく。

続いて、具体的な会議録の内容について見ていく。まず、「議題」として取り上げられた件数をみると「八木町」は、昭和 20 年代に 8 件、昭和 40 年代に 1 件の計 9 件である。職員の地域給引き上げ、道路工事計画、図書館建設についての請願であった。一方「今井町」は、昭和 20 年代に 1 件のみである。看護婦養成所設置についての請願であった。このように国会に請願が出される機会が多かったということは、昭和 20 年代に八木町は繁栄していたことを表しているのではないだろうか。

事例としての紹介や地名として名前が出された「議題外」の件数については、「八木町」は、昭和 20 年代に 3 件、昭和 30 年代に 2 件、昭和 40 年代に 1 件、昭和 50 年代以降は 0 件である。年代を追うごとに減少していることがわかる。過去の事例紹介の中で地名が出てきたケース、他の地区の道路計画の中で地名が出てきたケースである。他の地区の道路計画の中で地名が出てきたケースでは、大阪、奈良、滋賀及び京都の各府県下における道路、住宅、河川等、本委員会所管の公共事業について実地調査結果として、八木の地名が出現している。橿原バイパス計画の進捗状況についての調査報告である（参議院建設委員会 閉 1 号,1967.11.21）。

一方「今井町」は、昭和 50 年代に 1 件、平成一桁代に 2 件、平成 10 年代に 5 件、平成 20 年代に 1 件の計 9 件である。年代を追うごとに増加していることがわかる。どれも集落保存の例として地名が紹介されている。これを年代別に見ていくと、町並み保存の町として今井町が紹介される際の変化が現れている。昭和 50 年代の 1 件では、町並み保存に取り組んでいる最中の例として紹介されている（衆議院文教委員会文化財保護に関する小委員会 3 号,1975.3.4）。1993（平成 5）年に重要伝統的建造物保存地区に指定されて以降は、橿原市出身の議員や、奈良県の選挙区から輩出された議員が今井町を紹介している（衆議院予算委員会 16 号,1996.2.20）。また、2006（平成 18）年には、議員が実際に出張の機会を利用して現地訪問した際のことを語るようになっていく。以下がその会議録である。

ちょっと余談になるかもしれませんが、私、この間奈良県に行かせてもらい

まして、京奈和道路の一部開通のときにちょっと行かせていただいて、帰りに今井町に寄らせていただいたんですよ、委員の御地元の奈良県の今井町。私は大阪の堺なんですけれども、海の堺、陸の今井町と言いまして、環濠都市なんですね、両方とも。私の堺も環濠都市ですし、今井町もあの奈良盆地の中の、飛鳥地方の橿原市の環濠の町、行かせていただきまして、本当に感動いたしました。（衆議院国土交通委員会 15号,2006.4.21）

町並み保存に取り組んでいる最中から事例として取り上げられており、重要伝統的建造物保存地区に指定されて以降は、その取り組みが国会という場においても知名度を持つようになった様子が見えてくる。

このようにして、帝国議会会議録と国会会議録を分析した結果明らかになったことは、明治から昭和 40 年代頃までと、それ以降とでは地域社会における八木町と今井町の位置づけが変化したということである。具体的には、明治から昭和 40 年代頃までは、八木町は地域社会の中心としての機能を有していたが、平成に入ると勢いを失い、全国的な知名度を持たなくなった。一方、今井町は明治から昭和初期においては地域社会の中心としての機能を有していなかったが、平成に入り町並み保存の例として全国的な知名度を持つようになった。これは、今井町が取り組んできた町並み保存活動の結果、文化的価値を有する町として取り上げられるようになったということの表れである。八木町から見れば、今井町のような変化は、町を取り巻く文化的環境の変化ともいえる。

4 経済的環境——内膳町の台頭

これまでの分析からもわかるとおり、昭和 40 年代頃まで、八木町は地域社会の日常的な中心地としての機能を有していた。元々商業の町として成り立った町であり、昭和に入っても呉服店、洋服店、文具店、酒店、食料品店など個人商店が多く立ち並んでいた。このことは、地域経済の中心としての機能を有していたともいえる。周辺地域はというと、八木町の他に今井町には商店が立ち並んでいたが、その他周囲は一面が農地であった。しかし、高度経済成長期を機に世の中の仕組みが大きく変わることによって、町の様子も大きく変化する事となる。

高度経済成長期を機にもたらされた町の様子の変化はどのようなものであったのかということをはっきりさせるため、八木町周辺と、近鉄大和八木駅周辺の内膳町に注目し、昭和 40 年代以降の住宅地図の変遷について分析を行った。視覚的資料を用いることで、町の様子の変化を追うことができると考えたためである。住宅地図の変遷についての分析結果について、八木町周辺と近鉄大和八木駅周辺の内膳町のふたつに分けてまとめた。

4.1 八木町周辺の住宅地図からの分析

八木町周辺については、八木町のメインストリートである札の辻を中心に南北に延びている道に注目して変化を追っていくこととする。

まず、図5の1972（昭和47）年の住宅地図を見ると、八木町には、多くの商店が立ち並んでいる様子がわかる。呉服店、洋服店、化粧品店、文具店、酒店、食料品店など、多様な販売品を提供している。しかし、商店は次第に民家へと姿を変えていった。2013（平成25年）には、商店として営業を続けているのは、10軒のみとなっている。かつては商業の町として商店が立ち並ぶ街並みであったが、現在では民家が立ち並ぶ住宅地となっている様子がうかがえる。

このような町の様子の変化は、

基準地価の変化にも表れている。基準地価はその土地の有する経済的価値の基準となる数値であり、町の経済的発展や衰退と連動しているものであると考えられる。図6は、1988（昭和63）年から、数年刻みで八木町と内膳町の基準地価の推移を表したものである。ここでは、地域経済の中心としての価値の変遷を追うため、区分が商業地域とされているデータのみを対象とした。グラフを見てい

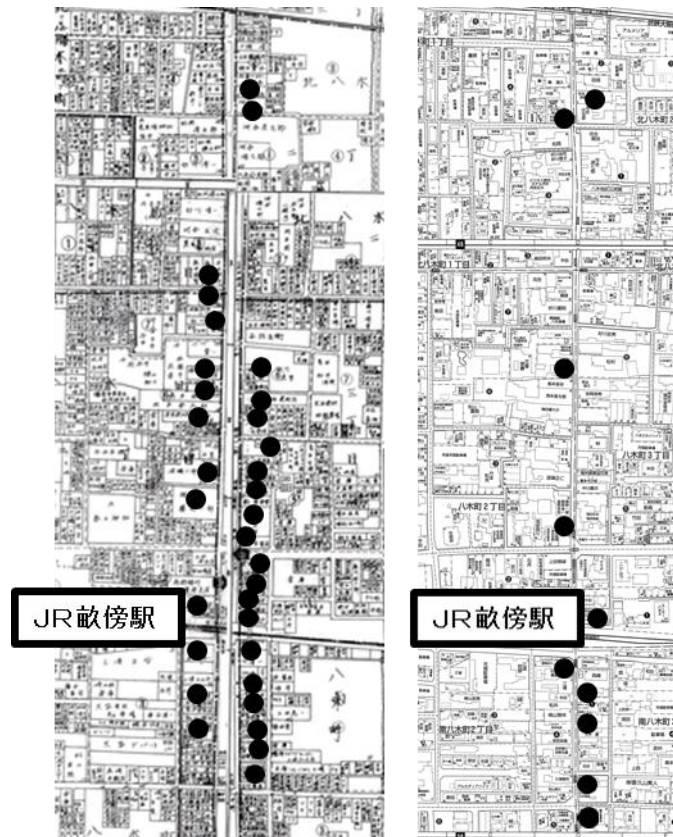


図5 奈良県橿原市八木町付近の住宅地図（●は商店）

左) 1972（昭和47）年，右) 2013（平成25）年

出典：ゼンリン住宅地図 1972,2013 より作成

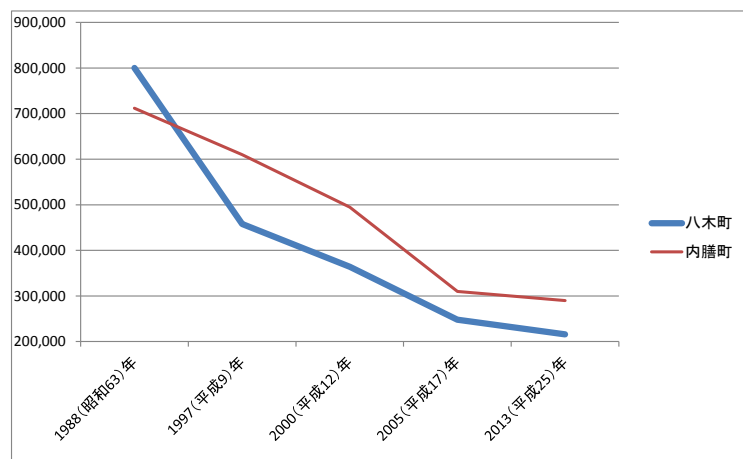


図6 八木町と内膳町の基準地価の推移（単位：円/m²）

出典：標準地・基準地検索システムホームページ検索結果，奈良新聞社（1988）より作成

くと、1988（昭和 63）年には八木町が内膳町を上回っているものの、それ以外の時期には一貫して内膳町が上回っている。このことから、八木町が地域経済の中心としての地位を失っていく様子が、基準地価の変遷にも表れていることがわかる。

4.2 内膳町周辺の住宅地図からの分析

近鉄大和八木駅周辺に注目して内膳町の変化についてみていく。図 7 の 1972（昭和 47）年の住宅地図を見ると、近鉄大和八木駅南側にはため池があり、北側にも建物はほとんど建っていない。農地も多く、町の中心地としての機能を持たない場所である様子がうかがえる。しかし、近鉄大和八木駅周辺の北側、南側ともに駅前広場として整備されていく中で、次第に多くの建物が立ち並ぶようになる。1975（昭和 50）年頃には、駅の北側に商業施設ダイエーが建設される。2013（平成 25）年の地図では、南側のため池はバスロータリーとして整備され、北側は近鉄百貨店や分譲マンションが立ち並んでいる。分譲マンション建設により、新規住民も多く流入したと考えられる。1972（昭和 47）年頃の農地が広がっていた面影はなく、駅周辺の便利な場所として機能している様子がわかる。

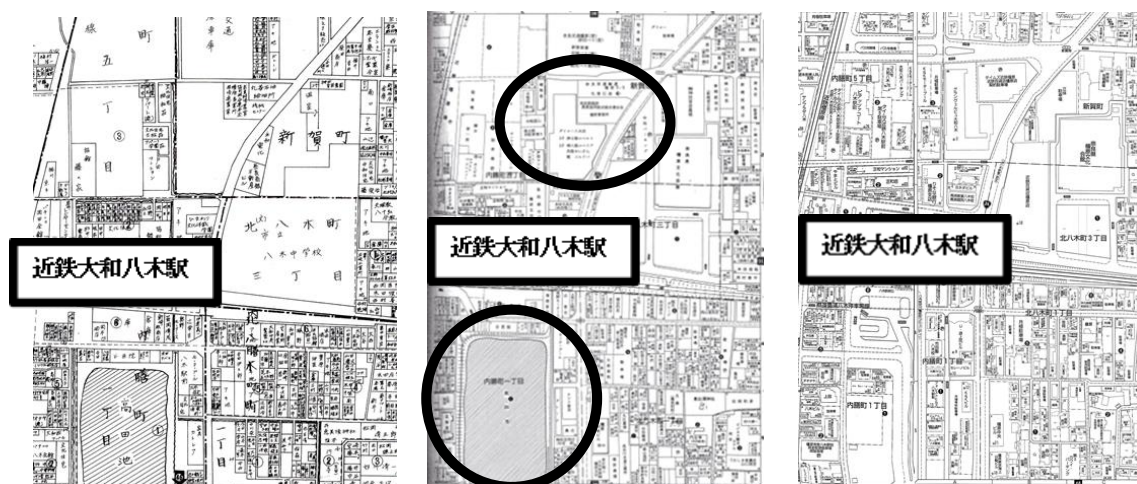


図 7 近鉄大和八木駅付近の住宅地図

左) 1972（昭和 47）年，中央) 1984（昭和 59）年，右) 2013（平成 25）年

出典：ゼンリン住宅地図『橿原市』各年版より作成

このことは、地域の生活用品・食料品の買い物の場所が八木町から内膳町へと変化したことを表しているといえるのではないだろうか。また、このような変化は、高度経済成長期における世の中の仕組みの変化によりもたらされたものだと考えられるのではないだろうか。八木町、内膳町界限では、自分たちの住んでいるところで商業もしくは農業を生業として生活することが主流だった。ところが、高度経済成長期に差し掛かり鉄道網が発達すると、大阪府下で働く人たちのベッドタウンとしての機能を持つようになる。大阪方面に直結する路線をもつ近鉄大和八木駅の年間乗降客数の推移を見てみると、定期、定期外共に、1972（昭和 47）年から 1994（平成 6）年にかけて、大きく増加している（図 8）。

電車通勤者の増加は、生活用品・食料品の買い物の場所の変化に繋がる。電車通勤者にとっては、自宅の最寄り駅周辺で買い物をすることが効率的な方法である。そのため、生活用品・食料品の買い物の場所が、駅周辺へ求められるようになった

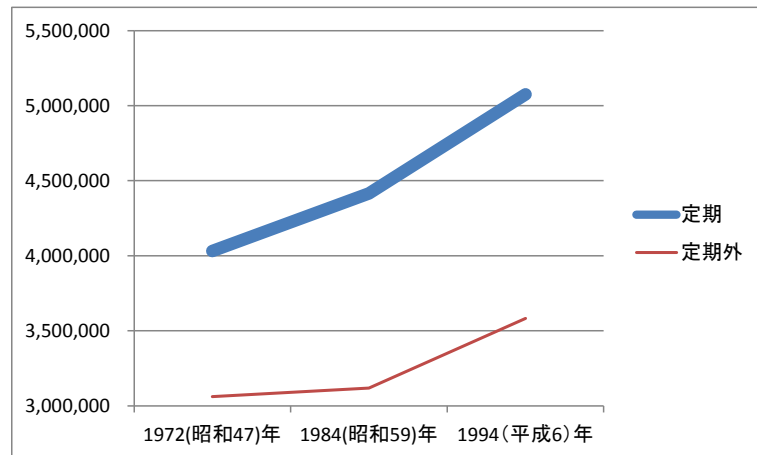


図 8 近鉄大和八木駅の年間乗降客数の推移（単位：人）

出典：「奈良県統計年鑑」各年版より作成

たとえられる。実際、近鉄大和八木駅北側に商業施設ダイエーが建設さ

れた 1975（昭和 50）年頃を境に、八木町の商店は著しく減少し、民家へと姿を変えている。これは地域における生活用品・食料品の買い物の場所の変化の表れであり、地域経済の中心が八木町から内膳町へと移り変わっていったことを表しているといえる。

このようにして、かつて商店が立ち並んでいた八木町が地域経済の中心としての地位を失い、農地が広がっていた内膳町がその地位を獲得するまでの町の様子の変化について、住宅地図の変遷の分析から明らかにすることができた。1972（昭和 47）年頃には、生活用品・食料品などを取り扱う商店などの建物は八木町付近に密集していたが、現在では近鉄大和八木駅を有する内膳町に立ち並ぶようになった。このことは、八木町にとって町を取り巻く経済的環境の変化ともいえる。

5 おわりに

八木町を取り巻く地域社会環境の変遷について、周辺地域との比較を行いながら、資料をもとに分析を行ってきた。その結果、八木町の周辺地域である畝傍町、今井町、内膳町は、時代の流れとともに変化してきたことが明らかとなった。これは八木町にとっては、町を取り巻く、政治的環境、文化的環境、経済的環境の変化であるといえる。また、そのような 3 つの環境の変化は、地域社会において八木町が果たす機能をも変化させたことがわかった。かつて、地域社会において日常的中心地としての機能を果たしていた八木町は、地域社会環境の変化の中で、その機能を周辺地域へ譲ることとなったのである。

今後は、このような地域社会環境の変化を受けた八木町においてまちづくり活動を行っている住民が、アートイベントをどのように受け入れて、自分たちの活動として行っているのかということを考察していきたい。

[文献]

- 平井良朋,1993,『目で見る橿原・高市の100年』郷土出版社,46.
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会,1990,『角川地名大辞典 29 奈良県』角川書店,1104-1105.
- 改訂橿原市史編集委員会,1987,『橿原市史 下巻』橿原市役所,208-213,234.
- 橿原市史編集委員会,1962,『橿原市史』橿原市役所,128-130.
- 国土交通省,2009,標準地・基準地検索システムホームページ, (2014 年 7 月 20 日取得,
<http://www.land.mlit.go.jp/landPrice/>)
- 国立国会図書館,2005,帝国議会会議録検索システムホームページ, (2014 年 8 月 7 日取得,
<http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/>)
- 国立国会図書館,2014,国会会議録検索システムホームページ, (2014 年 8 月 7 日取得,
<http://kokkai.ndl.go.jp>)
- 奈良県,1973,『奈良県統計年鑑』奈良県,135.
- ,1986,『奈良県統計年鑑』奈良県,142.
- ,1994,『奈良県統計年鑑』奈良県,142.
- 奈良県橿原市教育委員会,2010,『八木の歴史と文化』奈良県橿原市教育委員会,29.
- 奈良新聞社,1988,『奈良県年鑑』奈良新聞社.
- 千田正美, 1978,『奈良盆地の景観と変遷』柳書店,120-123.
- ゼンリン住宅地図,1972,『橿原市』ゼンリン.
- ,1984,『橿原市』ゼンリン.
- ,2013,『橿原市』ゼンリン.

(さがみ なな 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程)

Changes of local community environment in Yagi-cho, Nara prefecture: Focusing on comparative analysis with Yagi-cho and surrounding areas

SAGAMI Nana

Abstract

Many art events have been performed in Japan, since the early 2000s. An art event related to community development activity by local residents was performed in Nara-prefecture.

How the local residents accept the art event? And how the local residents connect their experience obtained from performing the art event to their community development activity? It is necessary to research the characteristic and the history of the local community to analyze these questions. Because the art event is performed by the local residents, it would be difficult to separate the art event and local community. So this paper tried to describe the characteristic and the history of local community where the art event was performed. And this paper focused on Yagi-cho as a case where the art event was performed.

Yagi-cho is one of the regions in Nara prefecture. There were various shops for neighborhood in Meiji- Taisyo Period. However, there are many houses in these days as the residential area. It means the function of Yagi-cho in local community was changed. In local community, how areas surrounding Yagi-cho was changed until Yagi-cho changed into the residential area?

This paper tried to describe the changes of local community environment in Yagi-cho through the comparative analysis with Yagi-cho and surrounding area. In this paper, the word “local community environment” means the various environments surrounding one area.

The analysis revealed two points. First, three areas surrounding Yagi-cho was changed with the passage of time. It means changes of three local community environment for Yagi-cho, politics, culture and economic. Second, changes of three local community environments also changed the function of the Yagi-cho in the community. It means that under the influence of the changes of local community environment, Yagi-cho was changed into the residential area.

(Keywords: local community, political environment, cultural environment, economic environment, Kashihara city)